

『徒然草』第十一段再考 ―柑子の囲いは盗人避けに非ず―

池上 保之

『徒然草』第十一段は「神無月の比」で始まる有名な章段である。兼好は山奥でひっそりと暮らす遁世者の庵を発見する。そして、その様子に心を打たれるのである。しかし、庭先の柑子の木に囲いがしてあるのを見て幻滅する。柑子を盗人に取られまいと厳重に柵を張った庵主の執着心を見咎めたのである。以上のような解釈が今日一般的であり、この盗人避けの囲い、という捉え方は林羅山『桮榼』（元和七年刊）以来の解釈である。

しかし、この囲いは本当に盗人を防ぐために張られたのであろうか。兼好を幻滅させたものは盗人避けの柵であるとされるが、すると不審な点がいくつかあることになる。兼好は「この木なからましかばと覚えしか」というように、柑子の木自体を問題視しているのであって、周りの囲いは付随的なものであったとも考えられる。また、そもそも盗人避けの柵だとは本文には書かれていない。問題は柑子の木だったのではないか。

そこで本発表では、柑子が中世、どのようなものとして扱われていたかを他の文学作品や古記録などから探り、それが遁世者の草庵にある意味を考えたい。また、木の周りの囲いについても、別の可能性を考える。それは盗人避けの柵ではなく、冬の寒さから柑子を守るための防寒垣だったのではないか、ということである。神無月、真冬が近付く時期にあって、風や霜に備えて囲いがされているのを目撃したのではなかったか。そして、これらの状況に接した兼好の心情を辿ってみたい。

また、この前段となる第十段は、家居というものと、その主の人の関係性を述べた章段であるが、本第十一段とも密接な関係があると考えられる。第十段については、既に論じたことがあるが（拙稿『『徒然草』第十一段再考』『百舌鳥国文』第二五号）、この両段の関係性も押さえた上で、第十一段の読解を試みたいと思う。

いくさ語りと禅僧 ―軍記物語と〈仏法〉との関係性に及ぶ―

源 健一郎

室町期における禅僧たちの日記には、琵琶法師によるいくさ語りの記事が散見される。ただし、琵琶法師の語りは、必ずしも「平家」語りに限られたものではなく、その内容は多岐にわたるものでもあった。また、その一方で、禅僧たちの日記には瞽者ではない人物による『平家物語』等にまつわるいくさ語りがあったことも、少なからず確認される。本発表では、応仁の乱という時代の劃期を含む十五世紀の禅僧の日記を対象に、そのあり方について検討してみたい。

『平家物語』等の軍記物語に由来する知識は、禅僧たちにとってはそれ自体で独立するものではなく、より大きな知識体系の網の目の一つとして認識されていたように思われる。それは、当時の禅僧たちにとって重要な活動であった漢詩や聯句の制作・注釈・講釈に関

わるものとしての位置づけであり、あるいは『太平記』がそうであったように、經典講釈の場において活用された可能性も想定されよう。

しかし一方で、禅僧たちのいくさ語り享受のあり方は、きわめて主知的なものであった。いくさ語りから得られた知識は、聯句会や遊宴等、室町將軍家等の権力者に対する、あるいは五山内部の円満な関係保持のために活用されることが専らであり、現実社会に展開する動乱を解釈する原理としては認識されなかったように思われる。

『平家物語』等の軍記物語では、〈仏法〉が、動乱の行方を左右する解釈原理として機能していた。当時の〈仏法〉の主たる担い手である禅僧たちに、そうした意識はほとんど窺われない。こうした思想的背景が、軍記物語史における『明德記』から『応仁記』に至る質的転換にも関わるものと考えている。

東照宮祭礼の創始と天台系法会の再編

―徳川頼宣による東照社小祥祭を中心として―

吉村 旭輝

日光山は、嘉祥元年（八七八）に円仁が三仏堂を創建し、日光山の本地仏を祀ってから三仏堂を本地神宮寺とする天台修験の一大拠点として、中世には存在していた。しかし、天正十八年（一五九〇）の豊臣秀吉による小田原攻めの際、日光山は鹿沼の壬生氏とともに後北条氏に加担したことでそれまで日光山が神領としていた一八万石の領地が悉く没収され、日光門前と山内、足尾郷七百石を残すのみとなった。その結果、それまで約三〇〇院あったとされている寺坊がわずか九カ院となり、日光山はおのずと奉仕していた宮仕、神人の減少をも余儀なくされていく。中世以来、日光山では法会を中心にさまざまな芸能が行なわれていた。

しかし慶長一四年（一六〇九）、徳川家康が日光山の山領を安堵したことがきっかけとなり、元和二年（一六一六）四月には徳川家康の遺言を受けた徳川秀忠によつて、日光山に東照社（東照大権現）が造営され、さらに元禄一四年（一七〇一）にはおよそ二万五千石と総目録に記され、神領としては中世の日光山をはるかに上回る繁栄をみせるようになっていた。

元和三年、久能山から日光山へ徳川家康の遺骸を移す小祥祭が執り行なわれた。この祭礼の創出には山王神道に基づいた展開による山王一実神道の創出および天台系の仏教的祭式が基本となっているだけでなく、豊臣家による秀吉神格化に依拠した京都での慶長年間の豊国社の祭礼を模範としたことが考えられる。

この小祥祭の指揮を執ったのが当時駿府藩主であった徳川頼宣と安藤帯刀であった。頼宣はのちに紀州藩主となるや天海を招き、全国でもいち早く元和七年に東照社を建て、翌年には官民一体となった和歌祭を創出している。このことから頼宣およびその家臣が東照宮祭礼の創出にどのような役割を果たしたのか。本発表では天台系法会を基盤として創出された東照宮祭礼成立の背景を、徳川頼宣の動向を中心に明らかにしたい。